

0. 「復興」を問う

「東北と復興」というタイトルをつけながら、実際にはあまり「復興」に焦点を当てることができなかったこれまでの2年間。福島第一原発事故に関わって多くの方達からお話を伺ってきたがどうしても「復興」そのものまで考える時間がなかった。

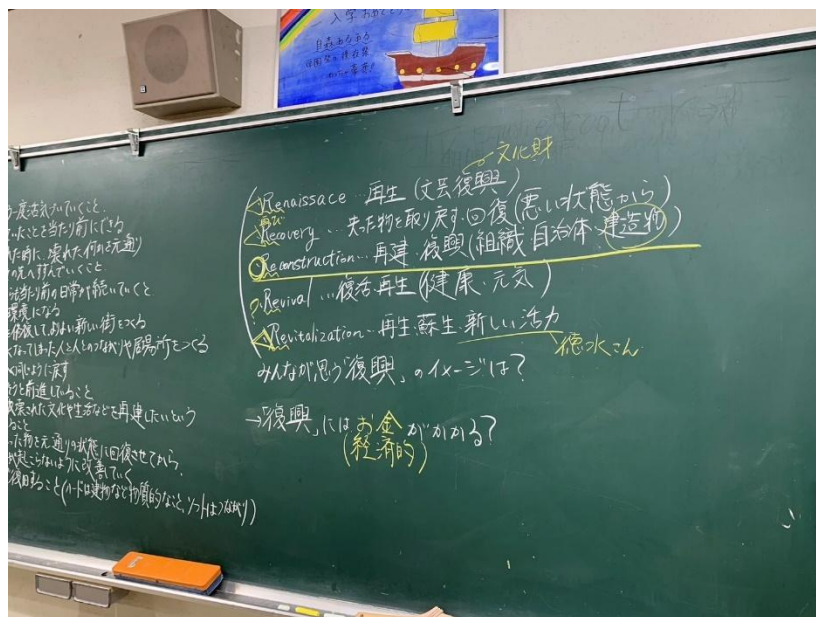
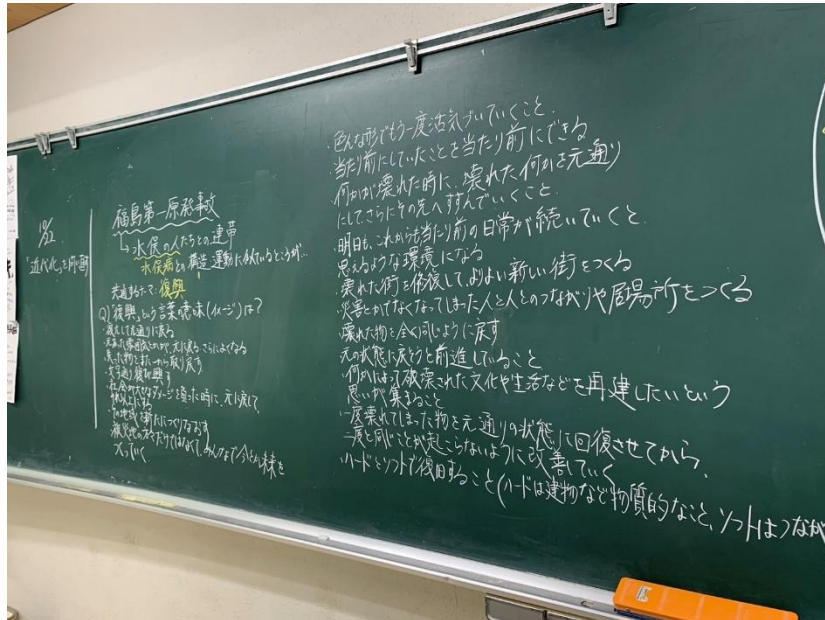
3年目となる今年は初めて前期の宮城県石巻市スタディツアーに続いて、福島県浜通りスタディツアーを実施した。そしてそのスタディツアーの事前学習で「水俣病」を扱い、「復興」ということをキーワードに学んだり、考えたりしてきた。以下、事前学習の「水俣病」と「福島県浜通りスタディツアー」、そして事後学習までの時間と内容一覧である。

日付	タイトル	内容
10月22日（火）	「復興」を考える	「復興」という言葉について英語から考える。
11月5日（火）	水俣病①	水俣はなぜ工場を誘致したか。 水俣と戦後「復興」とは。
11月12日（火）	水俣病② オンライン講演	水俣病についてのオンライン講演。
11月19日（火）	水俣病③	水俣病について加害と被害の構造を考える。
11月26日（火）	福島第一原発事故事前学習①	理科の教員から放射線・放射能についての授業。
12月3日（火）	福島第一原発事故事前学習②	日本の原子力発電の歴史。マスターナラティブとアイデンティティを問う。
12月7日（土） ～12月9日（月）	福島県浜通り スタディツアー	後に詳述。
12月10日（火）	事後学習①	スタディツアー感想交流。
12月17日（火）	事後学習②	スタディツアー感想交流（続き）。責任と主体性。

1. 事前学習の中で「復興」を問う

「復興」という言葉のイメージや意味について生徒達に問い、考えた。その後「復興」という意味で使われる英語の意味(renaissance、recovery、reconstruction、revival、revitalization)を考え石巻市スタディツアーで見えてきた「復興」の言葉はどれが当てはまるのかを考えた。

以下はその時生徒達に出してもらった意見を書いていった授業での板書である。



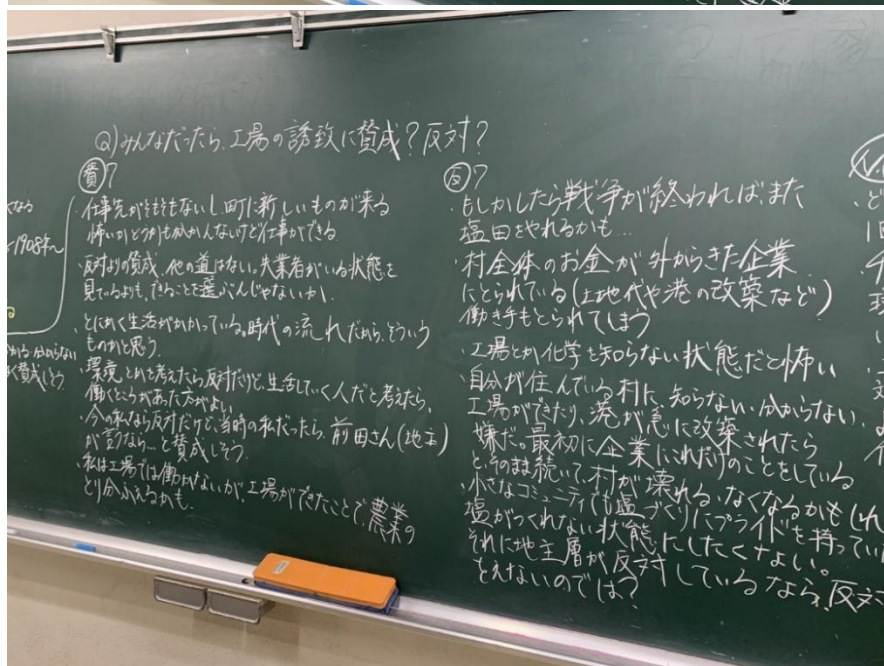
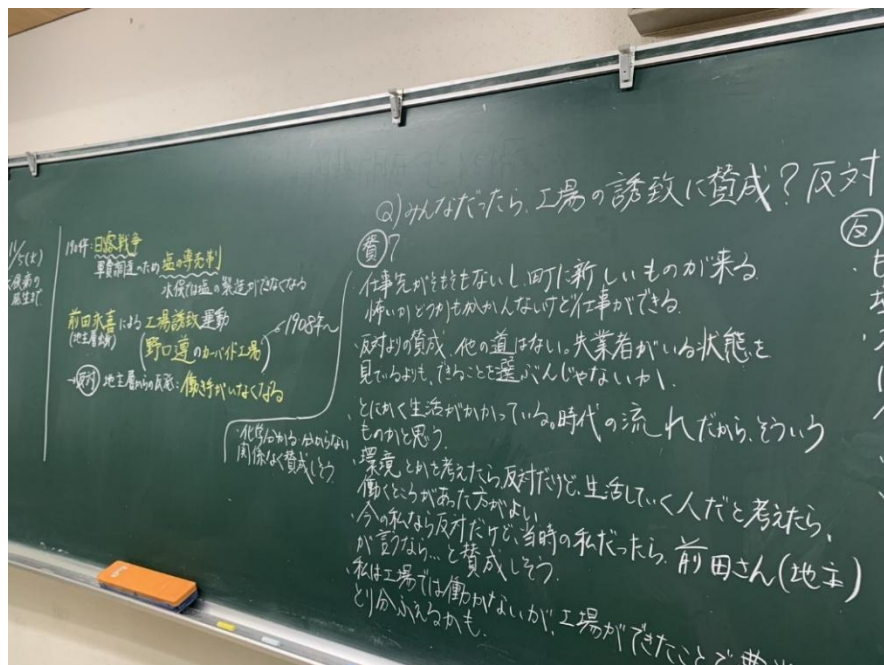
その後、1956年の経済白書を読み合わせした。「新しきものの摂取は常に抵抗を伴う。経済社会の遅れた部面は、一時的には近代化によってかえってその矛盾が激成されるごとくに感ずるかもしれない。しかし長期的には中小企業、労働、農業などの各部面が抱く諸矛盾は経済の発展によってのみ吸収される。近代化が国民経済の進むべき唯一の方向とするならば、その遂行に伴う負担は国民相互にその力に応じて分け合わねばならない。」とする部分を受けて、「負担を国民相互にその力に応じて分け合う」ことができているかどうかを子ども達に投げかけて終わった。

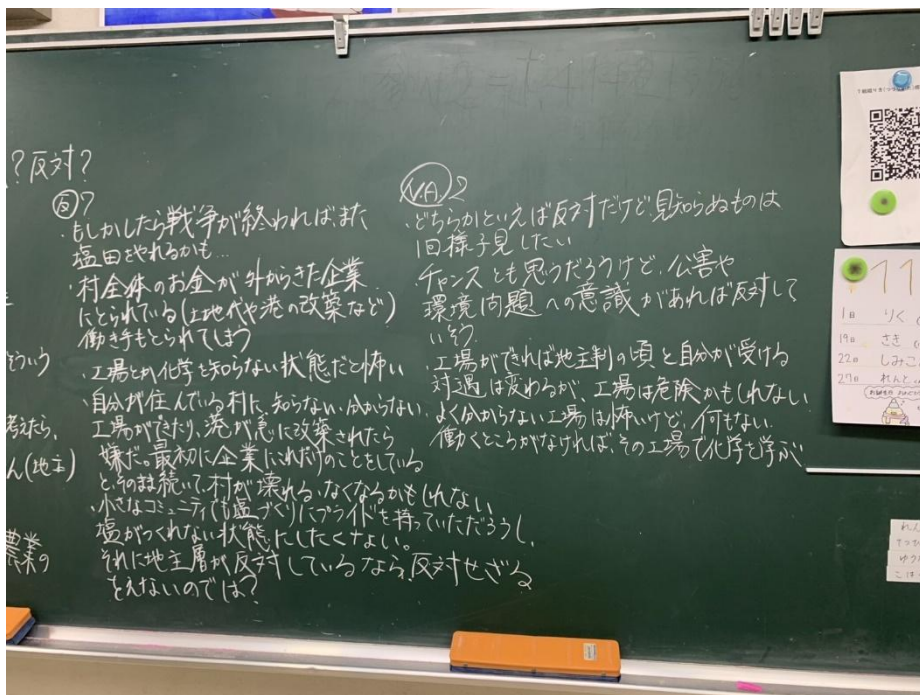
1. 水俣病についての学習-オンライン講演-

11月5日 水俣病に関する学習①

戦前の水俣市の歴史や工場を誘致するきっかけになったことについて説明。日露戦争による塩の専売制の導入を背景に、塩田から工場誘致への歴史を説明し、工場（後のチッソ）誘致の賛成反対（どちらともいえない含む）を問うた。以下がその時の議論の板書である。工場誘致がそもそも国策の結果であることに気付いてもらうために、工場誘致の是非を子ども達に議論してもらったが、これは福島第一原発の事後学習の中でそもそもなぜ福島第一原発が誘致されたか（誘致された土地には第二次世界大戦中に特攻隊の練習飛行場があった）とつなげて考えてもらうためであるが、少し伏線としては離れすぎていたかもしれない。同時にその地域の人達が「望んだ」結果だからその「責任」も負うという言説に対抗するための、国策の結果（振り回された結果）であることを伝えるための問いである。

一方で後から振り返ってみると、水俣での工場誘致が江戸時代からの地主による階級構造を崩すものであるという期待をされていたものであること、地主側がそれを望まなかったことから反対に回ったこと、港の漁師達が階級構造の中で下に置かれていたことなど当時の水俣の住民達の状況と、戦後の福島第一原発誘致とその反対運動の間の違いをもう少し丁寧に考える必要があったと考えている。





そのほか水俣病の公式確認としての発症例やチッソが戦後どういった商品を作っていたのかなどの歴史を中心に説明して終了した。

11月12日水俣病相思社の坂本さんによるオンライン講演・オンライン水俣病歴史考証館ツアー(zoom)

相思社の坂本さんからオンラインで水俣病歴史考証館をツアーし、水俣病の発症やその後の患者さん達の思いとそれに対するチッソや行政の対応を中心に講演いただいた。実際に水俣病歴史考証館のモノ資料を見ながら話を伺ったので、子ども達にとってもよりイメージはしやすかったように思う。患者さん達やその周囲の人達の運動や思いなども聞いた上で、今年起こった環境省のマイクオフ事件についても説明された。

以下が生徒達の感想(一部抜粋)である。

・私は「水俣病」という名前は知っていたけど、授業で学ぶまで実際に何が起ってどんな被害が出ていたのかを詳しく知りませんでした。今回お話を聞いて水俣病について知りながらたくさんの思いや考えが頭に浮かびました。水俣病によって大切な日々が奪われた患者さん達に私達、そして社会全体でできることは何かということや、水俣病という名称についてや、福島第一原発事故(汚染水など)や原爆(被爆二世問題)などとの問題の共通点(原爆の影響の明確な範囲がないこと)についてなど本当に様々です。このオンラインスタディツアーで新たな問題意識、視点ができました。これから福島ツアーでも学びを深め、この問題について多角的に考え続けていきたいです。

・水俣病について色々なことを知ることが出来ました。近年話題になっていた処理水問題で、ニュースなどでは安全性を再三伝えていて、それを信じていましたが、こうした水俣病での実例を知ると、本当なのか疑ってみる必要もあるかもしれない、うのみにする危険性を実感しました。今の水俣市民にとって、チッソとはどういった扱いなのでしょうかなのか?

・今回のお話を聞いて、豊かさって何だろう、という疑問を持ちました。人の生活を豊かにするために、何人も人が亡くなるって、その後の生活を、果たして豊かになったと言えるのだろうか?と。それから、壊された幸せな日常についても考えました。私は患者さんのことを、今回の話等でしか知らないため、患者さんの人生が、まるで水俣病のことに7割ぐらしめられたようにも思えてしまって、このような問題は今後二度と起こらないように、私達の代も考えていきたいな、と思いました。

・汚染水や風評の話など、今も過去の福島にもつながる話でこうやってつながっていくんだと改めてしれた。水俣病の病状とか診断基準など知らないから知りたいなと思う、後で調べたい。1 番最初に猫に症状が出たから猫 800 匹も使う必要あったりかなあ…。もっとはやくに解決できなかったのだろうか…。いずれまた水銀があふれてしまったらまた問題になっていくから終わらない問題だなと思う。福島原発問題もそうだけど、化学物質がどうにも消せないの問題すぎるよなあーと思う。今後の発展にかけて今は一時的にふさぐしかできないのか…。

・原爆の被爆者認定の訴訟でも、同じように、時間が終わった今でも、訴訟が続いているというのが、水俣病の訴訟と似ていると感じた。話を聴きながら、前回の授業での工場誘致の話し合いと重ねながら、前回の授業でも言ったように誘致の時点で、住民が、このようなことまで想定できなかったのが、水俣であり、原発導入とも重なるところがあるのかと思った。その中で、原発は現在の自分も恩恵を受けているものなので、これからどのように運用していくのか、考えていく必要があると思った。

・地方であり、財力（権力）の無い人達が被害者だったからこそ水俣病は、中々対応がなされなかったのかなと思う。やはり公害問題はかなり多くのものが地方軽視や貧困軽視が関わっているし、事が起こった後、前からそういった軽視の考えが無ければ、もう少し水俣病は大きな被害にならずおさえられたのかもしれない。福島の場合は、人が住んでいないからこそ被災地を（イノベーションコーストなどで）さらに事が悪い方へシフトしてしまっているというようにも思える。

・水俣病のことはずっと表には出さないようにさせられていたことを初めて知った。そんな中でもチッソの社長と直接話したりデモをして戦い続ける水俣の人達はすごいと思った。チッソが大きな会社だったために、水銀が原因だという真実は押しつぶされて水俣病がなかったことにされるのはなんか悔しい。また、水俣病にかかった人はまわりから見放され、風評被害がでて魚が売れなくなるから水俣病に関しては何も言えなくなってしまった状況も辛いだろうなと思う。そもそも水俣の失業した人のためにチッソがきて、水俣病の真実はチッソが多額のお金を払って隠す、水俣病の患者は補償金がほしいだけといった偏見や差別がうまれるなど、いろんなところに「お金」が関係しているなと思った。水俣病を通して福島でおこっていることがなんとなく想像できた気がする。

・言葉にならないくらいひどいというか、公害というより事件だと思う。チッソが猫の実験をもみけしたという事は、罪の意識がでるはずなのに、自分の利益を優先して目を背け続ける。しかもそれが現在、行政にも当てはまるのが惨い。救いが見えない。今年、環境省赴いたけど何にもしなかったのも、結局はスタンスは何も変わってなくて、風化するのを待っているのではと思ってしまう。このままひがいがいなくなっていった水俣病が負の歴史としてかん結してしまうのだけはさけなくてはいけないと思った。責任がだれにあるのかはとてもむずかしい問題だと思うけどチッソと行政は罪の意識を風化させないでくれー。

・埋め立てをして海がきれいになっても、水銀は残っているし患者さんもまだ沢山いるのに、その場しのぎのことしかしてくれない行政に不信感を持った。今全国に工場は沢山あるし、全く他人事出は無いと思った。「患者さんとかかわれる最後の世代」というのが印象的で、震災と同じようにまずは知って、伝えていくことが大切だと思った。

翌週生徒達の感想をもとに坂元さんともう一度 zoom で打ち合わせをもった。生徒達の感想の中にあつた疑問や補足説明が必要なところを確認して、その上で授業を行うこととした。

11月19日（火）水俣病③

その前の週のオンラインでの講演を受けて、まず感想の中にあった質問への坂本さんの回答を紹介する形で説明し、その後、加害と被害の構造が入れ替わってしまうことについての説明を行った。

すなわち被害＝水俣病の患者さん達、加害＝チッソ（企業）の構造である。ただしチッソだけではなく国策として戦後復興のためにチッソ工場排水を見逃してきた行政の加害責任も説明した。現在はチッソを県が税金を貸し付ける形で被害者救済を行っている。しかし患者たちがチッソや行政を訴えていることを「加害」とみなし、あたかもチッソや行政が「被害」としようとする風潮があることを説明した。すなわちニセ患者の存在を前提にしたり、患者認定を訴える人達（劇症化していない人達も含む）や救済を訴える人達にいつまでやっているんだという周囲からの冷ややかな目線や言動（政治家の言葉などを実際に紹介した）から、あたかも加害者と被害者が入れ替わっているような構造になってしまっているということを説明した。この辺りは坂本さんから時間がないため補足して欲しい、伝えて欲しいという内容でもあった。

チッソによって生産された化学製品が、日本（国）の高度経済成長を支えていた。

病気の原因が「チッソ」である⇔チッソで働く人が困る・水俣の魚が売れなくなる。

その上で、少数の「犠牲」によって多数が「助かる」構造にあるとき、「多数」の側にいる私達の責任はどう考えるべきか？高度経済成長によって今の日本があるとするならば、その高度経済成長を支えたチッソ、そしてそのチッソによって引き起こされた水俣病の責任を現代の私達はどのように引き受けるべきなのか、と生徒達に投げかけた。

そして後半は環境省のマイクオフ事件も取り上げて、相思社の永野三智さんのFacebook(2019年)の記事を取り上げた。

今日。嵐の中の離島巡りをし、それぞれの患者さんの話を聞きました。環境省の人が東京から異動の挨拶に来て、同行のために。

50代の患者さんは、こどもの頃、自身の父が水俣病に倒れた50年近く前、近所の人が川で洗濯をしていた母に石を投げ、「お前が認定されたせいで魚が売れなくなった」といわれた恨みを語り、それから「環境省の職員が2年や3年で異動することで何度も同じ訴えをせねばならない」といいました。環境省の人は「チッソじゃなくて島の人を憎んでいるんですね」とか「へえ、大変ですね」とか「ひどいですね」とか「ダメですか」とか言いました。言葉が違うという感覚。それは東京の人と不知火海の人という方言の違いではなく。一方通行な、テレビを見て、お茶の間に感想をいうような。50代の患者は、「いえ、私たち島の人間はみんな、チッソを憎んでいます」といいました。

別の島で同行した80歳近い患者さんは、45年、地域の患者たちのことを訴えています。自分のことは語らず、人のために尽くす人です。最近足が悪くなり、杖の支えがないと歩けません。雨の中を歩いて移動しようとしたとき、環境省の職員が両脇を支えました。歩き始めた彼は、「あたどん（あなた方）には本音は言わんとはい」と職員に言いました。職員は軽く「えー、本音でいきましょうよー、本音で」と流していました。私はその含蓄ある言葉に、心打たれました。目の前の、別空間で放たれたこの言葉をどう理解していいのか？ 私と同じ年の頃からどんな思いで環境省と交渉をしてきて、その挙句、あなたがたに本音を語れないと言っている彼の切なさだったり、そう言うことで同時に彼は、自分の心や尊厳を守っておられるのではないだろうかとも感じて、胸が熱くなりました。

記事の文章を読み合わせした後、子ども達と下線部が引いてある部分「言葉が違うという感覚」や環境省の職員さんの態度や言葉と患者さんの間の「溝」はどこから発生しているのかについて子ども達に問いかけた。

ある生徒は、環境省の職員が水俣病を経験していないから、経験しているかどうかの差だと答えた。当事者性のなさから出てくる言葉だという意見もあった。国、行政の側の窓口側の人間だという自覚がないのではないかという意見もあった。

その上で福島第一原発は東京電力のものであり、そこで発電されていた電気が関東で消費されていたこと。私達がスタディツアーで訪れる福島県浜通りで出会う人達に対する関東に住む私達の加害責任をどう考えるべきか、そしてその上でどのように声に耳を傾けるべきかを伝えた。場合によってはこの環境省の職員と同じようなことが起こりうるということを伝えた。

2. 福島第一原発事故に関わる事前学習

11月26日（火）

理科の物理専門の教員から放射線と放射能についての授業をしてもらった。放射線というものがそもそも何なのか、自然界にどれくらいあるのか、人間の身体に影響があるといわれている量（単位も含めて）がどれくらいなのかについて講義をもらい、生徒達から質疑応答の時間を設けた。その後残っている時間で原子力発電の歴史について、原子力爆弾の開発から核の平和利用にいたる歴史の説明をした。

12月3日（火）

原子力発電の歴史と日本、福島第一原発に関わる歴史について説明した。現在日本にある原子力発電所の位置や数なども資料を配布して説明した。後半には急遽ピンチヒッターで引率としてつくことになったもう1人の教員から自己紹介と自身の東日本大震災後に経験した原子力反対運動をしている人達についての見方、沖縄修学旅行の際の本土からやってきた人達に対する沖縄の人達からのまなざされ方など。自身のアイデンティティ、立ち位置とマスターナラティブ化されていく語りをどのように捉え、受け止めるべきか。関東から来た私達の言動がどのように加害者性を帯びてしまうのか、あるいは福島の人達からどのような事実を突きつけられるのかについて話をした。終わり際に「福島に行くことが不安になってきた」と言う生徒がいたが、こうした態度をもっている生徒はかえって安心だと感じた。

3. 福島県浜通りスタディツアー

今回の福島県浜通りスタディツアーは以下のような旅程で行った。

12月7日（土）

相馬高校放送局との交流

おれたちの伝承館見学

12月8日（日）

東日本大震災・原子力災害伝承館見学

法鏡寺伝言館・未来館見学

双葉屋旅館（宿泊施設）女将さん講演

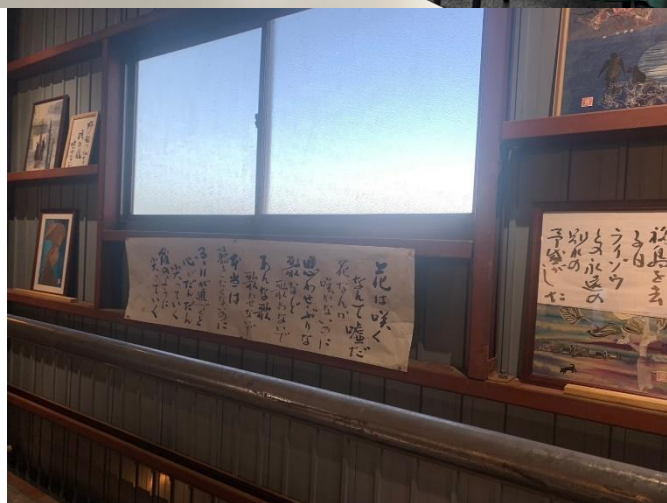
12月9日（月）

大熊町立学び舎ゆめの森学園見学、交流

いわき市 古滝屋旅館にて大熊未来塾 木村さん講演、原子力災害考証館見学

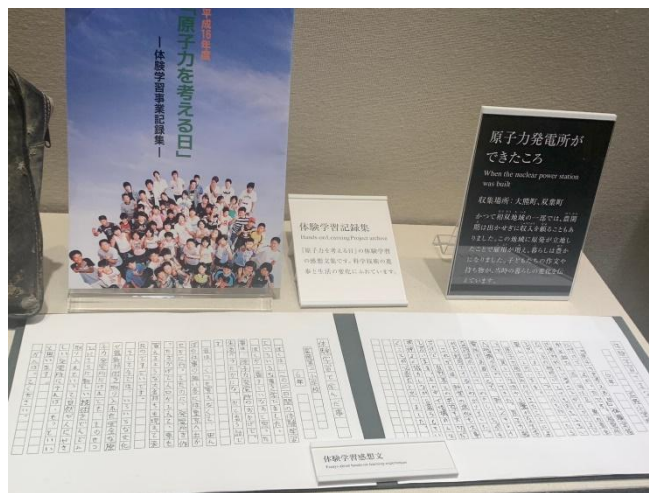
12月7日（土）

12月7日（土）の朝から集合し、貸し切りバスで埼玉県から福島県まで移動した。昼頃に相馬高校に到着し、その場で相馬高校放送局の作った映像作品を、放送局の生徒・顧問と一緒に見た。その後昼食でお弁当を食べて、おれたちの伝承館に移動して見学をした。展示品を時間をかけて見学したのちに、おれたちの伝承館の隣にある放射能測定センターの白髭さんからもお話を伺った。白髭さんはもともと福島第一原子力発電所に清掃（除染）の仕事で入っており、東日本大震災当時も第一原発内にいらっしゃった。第一原発事故後にはさらに本を読んで勉強し、測定センターで現在は日々放射能を測定していらっしゃる。実際に測定センターに入れて貰って、順番に生徒達は話をしてもらった。



12月8日（日）

東日本大震災・原子力災害伝承館に開館直後に訪れて午前中は館内をそれぞれ自由に見学した。今回原子力災害伝承館の方に、運営団体である福島イノベーションコースト構想推進機構の主体がどこなのかを尋ねた。最初は福島県というお話だったが、話を伺っていくうちに国だという。県庁の人が出向してきて県が後押しをしてくれていると言いつつ、国の文科省、復興庁、経済産業省、国交省もかかわっているという。聞いていて不思議な感覚になったが、結局福島イノベーションコースト構想推進機構を運営しているのは国と県の両方ということなのだろうか。それでも最後は推進機構を動かしているのは福島県だとおっしゃっていた。午後は浪江町の宝鏡寺の中にある伝言館・未来館を訪れて、こちらでも自由に見学してもらった後に亡くなった宝鏡寺の住職でこの伝言館・未来館を作った早川住職の奥様からお話をうかがった。この講演の中で生徒が「どうやったら復興と言えますか？」という質問をした際に「復興はできない。町ができるとしてもそれは元の町ではなくて新しい人たちや新しい建物による新しい町だ」という返事に高校生たちはかなり衝撃を受けていた。その後双葉屋旅館に戻ってから、女将である小林さんからお話を伺った。



12月9日（月）

2泊3日、お世話になった双葉屋旅館を出て大熊町の大熊町立学び舎ゆめの森学園に向かう。午前中は学び舎ゆめの森学園での講演、案内と交流の時間である。講演は校長・学園長の南郷さんがしてくださった。ご自身の高校時代の課題意識や問題意識と合わせて、東日本大震災後に福島県に来た経緯についても説明された。校内は理想とする教育のためにこういった建築上の工夫や設備の工夫があるかについて実際に見て回りながら案内され、後半はゆめの森学園の生徒達の学びの時間に実際に高校生達が入れて貰うという形がかかわらせていただいた。ほんと大熊で昼食をとったのち、最後の訪問先である、いわき市の古滝屋旅館、原子力災害考証館へ向かう。古滝屋旅館では、大熊未来塾の木村さん、そして原子力災害考証館の里見さんからお話を伺った後、原子力考証館を見学させていただいた。原子力「災害」ではなく原子力「事件」だという里見さんの言葉からは、これが東日本大震災という天災にともなうものではなく、原子力発電所を利用して、利益や豊かな生活を享受してきた人間が原因によるものだという思いを強く感じた。東京電力や原子力を推進してきた国だけではなく、東京電力の電気を使って豊かな生活を享受している私達への問いかけもそこには含まれていた。木村さんはご家族をなくされ、とりわけ娘さんの夕風さんについてはあのとき原子力発電所事故がなければ探しに行く、助けに行くことができたのかもしれないという思いを強くされていて、だからこそ同じあやまちをくり返さないように講演活動をされていた。予定よりも1時間ほど多く滞在して、その後埼玉へ帰った。3日目の振り返りも含めて、その後帰ってきてからの授業でスタディツアー全体の振り返りを行った。

4. 浜通りスタディツアー終了後の感想

振り返りとして帰ってきてから、冬休みに浜通りスタディツアーの感想を書くことを課した。以下はその一部抜粋である。

A さん：ツアーから帰り、振り返りをされていてこんなことを思った。

「思ったこと」を「考えたこと」にしなければいけない。」

このツアーが「考える」という点でとても難しかったのは、ただただ新たに知ったことが多かったというだけではなく、その知った事柄同士には繋がりがあり、その繋がりは福島第1原発事故以外にも社会で起きた、起きている問題とも繋がるからだ。

これは考え始めると果てしない問題で、答えを導き出すことは容易ではなく、大変だ。しかしツアーで知ったことを一度整理し、ツアーで思ったことをそのままにしておくのではなく更に深めて「自分の考え」に落とし込まなければ、自分の中でこのツアー自体も生まれた問題意識も曖昧なものになってしまうと思った。なのでツアーの内容、そして思ったことを付箋に書き出し、整理してみた。

私がこのツアーを通して考えたことは「被害性と加害性/善と悪」についてと、「自然との共生と平等性」について、そして「私たちにできること」についてだ。

まずは「被害性と加害性/善と悪」について。相馬高校の放送部の2人の生徒さんが見せてくれた映像からは国が提示している情報の不確実性が感じられた。そして、ツアーの中で幾度となく耳にした「イノベーションコースト構想」という言葉。国営の伝承館では最後の展示で大きく紹介されていた。新たな建物を作り、街を作り変えていく。一見素敵なことのように感じられるが、実際は町としての経済的なことのためにその場所に住む人々の思い出のものが壊されていた。私は考証館で里見さんがおっしゃられていた「外見だけ見られてしまう」「町民は望んでいない」という言葉が印象に残っている。

また、同じく考証館でお話を伺った木村さんのお話から「防潮堤の下にはまだ遺骨があるかもしれない。復興の下で捜したいと言えない遺族がいるのではないか」という言葉があった。国が進める政策によって苦しみ続ける人がいることを知った。これは福島だけに限らない。水俣病や、沖縄戦、その他にも社会で起こる様々な問題に言えることだ。国の利益のため、一部の人が犠牲になる。しかし、私は一概に国が悪いと言えない。なぜなら私は国が取り組む政策によって利益を得ているからだ。そうすると、私は間接的に「加害/悪」ということになる。

問題はこの事柄に「当事者性」が関わってくることだ。当事者性がないと考えることもできてしまう。私自身、今回のツアーを通して、なんだかとても重たいものを背負った気がする。それは今まで学んできたことを通じて、私が当事者性と少しずつ向き合い始めているからだと思った。学び舎ゆめのもりで南郷さんがおっしゃっていた「高校生の時に思った課題意識をそのまま持っていたら…」という言葉と、メンバーでの振り返りの際にでた「社会の流れの早さについていけるのか」という問題。私達が学んでいく内にも原子力再稼働への道は進んでいってしまう。だから、私は今、自分が向き合い始めた当事者性や、問題意識をこのまま持ち続けていきたい。

B さん：例えば、福島では山菜やきのこを採ることが季節の楽しみの一つとなっている。それを近所の人におすそわけすることで、地域の人々が自然とつながりを深めている。これらの活動は単なる食料調達ではなく、人々の暮らしや絆を作っていく大切な要素だった。そして、伝統的な踊りや太鼓、東北六魂祭や桜まつりの映像が特に印象に残った。「地域の絆によって守られてきた」「地域の人々で踊りを受け継いできた」という言葉を見て自分の生活と重ねてみると、私はこれまでの6年間、民族舞踊や和太鼓を続けてきて学校の公演だけでなく、外部での公演にも参加する機会があった。最初は単純に踊ることが好きで、普段触れることのない昔の生活や日常の動きを踊りを通して感じるのが楽しかっただけだ。だが、今回のスタディーツアーを通じて、伝統芸能が持つ意味や役割を知ったことで、自分がその踊りを「受け継ぐ一人」とあるという責任を改めて実感するようになった。

東北の祭りや伝統芸能は震災や原発事故を経験した地域にとって単なる文化保存だけではなく「復興の象徴」としての役割を果たしている。震災後、地域の人々は失われそうになった伝統を守りつつも新しい形でそれを未来につなげようと努力してきた。その背景には「この地で生き続ける」という強い意志を感じた。

復興の難しさは、ただ建物やインフラを再建すれば解決するものではないと思った。震災によって生活基盤を失った人々が地域に戻るには、住まいや仕事が確保されるだけでなく、地域コミュニティの復活が必要に感じた。特に福島では、放射能汚染による健康不安や風評被害が問題になって人々が福島に戻ることや地域で生き続けることのハードルが高くなってしまった現実を知ると、復興には物理的な再建だけでなく、人々の心をつなぎ直す取り組みが大切だと思った。

伝統芸能の復活も、そのひとつだと思っている。震災によって中断を余儀なくされた踊りや祭りが再開されることは、人々に希望を与えるだけでなく地域のつながりを取り戻すきっかけにもなると思った。実際、震災後に東北六魂祭が始まったことには、そうした意図が込められていると感じる。けど、伝統芸能やお祭りの需要があまり外から見ると理解されないこともあるとおもった。文化や芸能は、過去のも物ではなくてこれから形を変えながら残していくべきだと感じた。

Dさん：水俣病と福島原発の共通点として挙げられるのが政府の対応の不適切さです。講演や地域の方の話を聞く中で政府はいい事ばかり外に伝えて現実を発信していないと聞くことが度々ありました。

最初私は半信半疑でしたがその話が本当のことであつたと実感したきっかけが福島のALPS処理水の問題です。これまで、私がメディアで見てきた情報は政府や一部の議員が処理水の安全性を強調し、復興や除染をアピールするようなポジティブな情報なことがほとんどで、正直私は「処理水の放出はちゃんと無害になった上で行われているのだし復興や除染への大きな一歩」だと考えていました。

しかし、実際に現地で住民の話を聞くと、地域住民の完全な理解や賛同もなしに行われていたこと、基準値を下回っているとはいえ放射性物質が完全に取り除かれている訳では無いということを知り、なぜ正しいことを発信しないのか、なぜ隠すのか、政府や企業が安全性を強調しても、地域住民の声を無視して進められているのでは行政の自己満足でしかないし、それを本当に「復興」と言っているのかという疑問と複雑な感情を抱きました。

水俣病も福島原発事故も、どちらも企業と経済成長が根底にある事象です。どちらも発展によって犠牲となり、発展や風評被害のために誤魔化され、迫害された地域住民や被害者がいると知りました。そしてその「発展」の責任は一般国民にもあると知りました。水俣病の原因となった工場と福島原発はどちらも企業管理の施設であり、それこそ政府が関与するほど日本の経済成長や発展、日常生活に深く関わるものでした。またどちらも「企業も地域の経済を支え、地域はその企業に依存して成り立っている」という構図が、両者に共通していました。

そうした「企業のおかげで地域がある」という状況下で、工場や原子力へのリスクを訴えても無視されるどころか悪者扱いされるため我慢せざるを得ないような事態になり、事故や公害が発生した後にそうした人達が自責の念に駆られ強い後悔をしていたという現実を知り、なんとも言い難い感情を抱きました。

しかし、その企業がないとどちらにせよ地域が廃れてしまう。リスクがあつたとしても事業に依存せざるを得ない現実があるというのも事実。地域存続のためにリスクを受け入れざるを得ない現状があり、その結果が水俣病と原発事故なのだと知りました。おそらくそうした状況になっている地域は水俣と福島以外にも数多くあると思います。

今後同じような公害や事故を起こさないために何を変えていくべきなのか、今解を出すことはできませんが、今後自分の中で、社会として考えていくべきなのではないかと思っています。

Eさん：まず今回の東北と復興のスタディーツアーで、私が1番印象に残った点は、やはりフレコンバックについての詩だと思います。環境学の選択授業で存在は知っていて、今までは、土等の放射能廃棄物が沢山詰め込まれていて、福島第一原発付近に、これまた沢山、置かれているだけのものかと思っていて。その中の幾ばくかに詰め込まれているものが、ショベルカーの黒い爪で引き裂かれて、切り取られた、誰かの故郷で、思い出であるという考え方は、今まで一度も描けていなくて。言い方はあれかもしれませんが、今回のスタディーツアーで知れて、良かったなと思いました。知れてなかったら、もしかしたら一生知らずにいるところだったと思います。この時の感情と同じような感情を抱いたのが、国の伝承館…？の外にあった写真達のうちの一枚で、小さな姉妹の2人が、防護服を着て、子供部屋のようなところで、お人形等を白いビニール袋に入れている写真だったのですが、もうこの子達が、このお部屋で防護服をとって、震災前のように過ごすことは、もうできないのだろうな。もっと行くと、もうこの部屋に入るのも、この写真の時は最後で、この後お家は取り壊されてしまったかもしれないと思うと、原発事故がどれだけ、今までの日常と、故郷を壊すか、というのをありありと感じました。

また、相馬高校にお伺いした時に、生徒の方からのお話で、震災をぎりぎり知れている最後の代の私たちができることは何かと考え、活動しているということ。また、例えば原発問題が全て解決したとしても、伝承はずっと続けていかなくてはならないということがあって、私も生徒の方と同じ年代なので、私も考えている、と思え、また、私はもし原発問題が全て解決したならば、もうそこがゴール、叶えることがとても難しい夢、というように感じていたけれど、生徒さんは、ずっとずっと、同じ過ちを繰り返さないために、伝承し続けなくてはいけない、という言葉に、そうか、なるほどな、と、スッと腑に落ちた感覚を抱きました。また、今の生徒さんが作られている作品は、原発事故の「現在」を伝えているのが、今を生きる私たちにとってすごく親近感を持って見られていいなと思いましたし、現在を記録に残していくことによって、何年か経ったあと、全ての動画をまとめると、原発事故問題が時系列に記録されて、後世に残す貴重なデータになるんじゃないかな、と思いました。…（中略）…

それから、私は授業やスタディーツアー内で何回か使われていた、被害者と加害者という言葉に疑問を抱きました。授業内でも、チッソと水俣病の患者さんは、どちらとも言えるという話が上がっていましたが、説明をするのは、この言葉が1番伝わりやすいのかな、と思います。ですが私は、本質的に考えるならば、これは今の人間社会の構造上、生まれてしまった歪みであって、これまで生きてきた誰しをも、曲解すれば加害者と取ることができるわけで…。被害者、加害者、という言葉を使うだけで、なぜか思考停止してしまう気がしました。全部全部、グレーゾーンなのに、それをはっきりさせてしまうような言葉だからかも知れません。ただの私の発見ですが、伝えてみたいので乗っけてみました。

復興という単語について、自分なりに考えて、文を作ってみたりもしたのですが、まとまらなかったのもうちと私の人生の中で寝かせます。

Fさん：今回のスタディーツアー、事前学習は一貫して善悪や責任、そういった絶対的ではない概念について考えさせられた。石巻と決定的に違うのは、石巻は被害が可視化されていて具体的でありさらに被害自体は自然由来のものであり責任はどこにも帰属できないというのが共通の認識としてあったと思う。対して福島は被害が複合的であり風評被害や放射能など可視化されない被害が甚大であった。自然災害と原子力災害の違いはこの可視化されない被害から芽生える心理社会的不安から生まれるのだろう。可視化されない被害というものがどれほど人を不安にさせるか、心を乱すのかを痛感した。さらにこういった可視化されない被害というのは誰にとっても加害者になりうるということを理解させられた。根本的な原因の責任追及はもちろんすべきだろうが、そういった根本的なものに全ての責任を押し付けて可視化されない被害に加担した加害者の責任が放置されているのが現状ではないだろうかと感じるようになった。その加害側に立っている者は自分も例外ではないと自覚したからだ。この反省に至るまで時間を要してしまったが、まず私が原発に興

味を持ったきっかけは物理の本を読んで核分裂反応に魅せられたからである。そして高一の時に行った広島
のスタディーツアーで人智を遥かに超えた現象を人間は扱えるのかという問題に対峙した。テクノロジーと
人間の関係性。技術を開発することに限界はあるのか。そこに責任は発生するのか。そんな問いを抱えて福
島に望んだ。そしてどこに責任があるのかという問いに真摯に向き合って考えていたと思うが、結果として
分からないという結論に至ってしまった。それはどこに責任が帰属するのかが分からないという事ではなく
(原因がどこにあったかは一目瞭然であるので) 私が責任を問う事によって生じる自分自身の責任とどう向
き合っていくべきか分からなくなったという事だ。一人の高校生でしかないなんの専門性も知識もない私が
少し物事が分かったような気になって簡単に善悪を定め鉄槌を下そうとしていた事が恐ろしく思い始めたか
らだ。私は以前から無知の知という言葉大切にしている何かの判断をする時本当に自分の知識が正しいの
かどうか疑いかかる事を徹底したつもりである。しかし福島や水俣病は私が抱えられる情報を遥かに超えて
いて処理しきれず、感情的になることも多かった。情報過多はかえって情報不足を引き起こすと聞いたこと
があるがそれと近いものだったと思う。というかそもそも私が福島に赴くに当たってテクノロジーだとか
原子力について考えようとしていた姿勢自体を反省するべきであったと思っている。私があの日対面したの
は大きな不安感に苛まれながらも福島に残るという選択をした福島の人達だった。あの土地に残るという事
は様々な努力が必要だったと思う。そんな尊敬すべき人達を前に自分の思惑に囚われ続けているなんて事は
あまりにも思慮が足りない、私は無意識に福島ヘスティグマを背負わせていたのかもしれないと生の声を通
してやっと自覚できた。現地へ足を運ぶことの意義とはここにあるのだろう。理不尽に奪われたにも関わら
ず活気を取り戻そうとする逞しい姿勢を、私が、もっと大きく言えば県外の人達が勝手に背負わせたスティ
グマやパターンリズムで掻き消してはならないと強く思った。私は優先して責任を問わなければならない対
象を見誤っていたのだと、自分自身に責任を問うことがまさに私が私として生きる事における責任なんだ
と理解した。自身の内省を踏まえた時、社会はあまりにも自身の責任に対して無責任ではないだろうか。他
人や権力に責任を押し付ける事は容易に行えるが自身が行なった言動がどのような影響を及ぼすかどうか考
慮せずに恣意的に発言してしまう人が多いと感じる。こういった振る舞いが福島や水俣の方々を風評被害と
して苦しめていると私は思うし、日常生活においても用心しなければならない視点だ。自由の履き違えとい
う言葉が学校内で流布していると思うが言論の自由についても同じ事が言えるだろう、例えその発言が正義
感による発言だったとしてもその発言が周りにどんな影響を及ぼすか一度考える責任がある。責任を担う事
で言論の自由を手にする事ができるとも解釈できる。簡単に情報を発信できるようになった世の中で発言に
付随する責任というものを一人一人が意識する必要があるというのが個人的な大きな学びであった。

おれたちの伝承館に行った後、アートと伝承の役割と責任のようなものを凄く考えさせられた。私自身以
前から現代アートが大好きで色々な作品と出会ってきた。アートというのは作家の主体性の表れであるし、
現代アートと括られる作品は純粹に制作された年代に由来しているともいえるが現代における社会問題や社
会情勢を反映し、社会への問題提起や批判を感じる作品の総称ともいえる。アートを展示するという事は作
者と他者の関係性を強制的に結びつける程の影響がある。アートはある種の語りであってそれを見せつけ
られた以上、私は単なる鑑賞者ではなく参加者に昇華する必要がある。そこには作者自身に責任が伴って
いて、その責任の一部を参加者である私は担うという選択肢を渡されたかのような気にもなる。おれたちの伝
承館にあったのは、数字や科学的根拠ではなく感情であり、作者の魂である。現代社会において感情という
のは軽視されがちだと感じるがアートというのはそういう感情や信念をビジュアル化し保存する事ができる
から私は好きなのだ。原子力災害伝承館とおれたちの伝承館の本質的な違いは自己満足的な側面を含んで
いるかどうかだと思う。そもそもアートというものの出発点は自己である。伝承という言葉には記録や知恵だ
けではなく感情などの目には見れないものも含まれているし、当事者と非当事者の転換が為されないと伝承
は成立しない。私が伝承活動を見届けるという事はただ自分の身を守る方法の学びを得る事だけでなく伝承
の後継者になりうる事の重みを感じる。この重みはある種の責任なのかもしれない。(中略)

たまたま youtube で水俣市長が原発事故の直後に緊急メッセージを公開した動画を見つけた。その中で市長は「しかし、事実に基づかない偏見差別、非難中傷は、人としてもっと怖く悲しい行為です」と発言している。このメッセージはネットの海にいる無数の私たちに向けたメッセージである事は明白だし、市長が風評でどれ程苦しんできたかが想像できる。水俣の教訓というのは様々な観点で語られるものだが、私たちは部外者でも観測者でもなくその教訓を生かさなければならぬ対象の一部であると強く思う。

Gさん：そんな早川住職を近くで見守ってきた早川さんに「早川住職と早川さんは今の復興をどう思っていますか」と質問をした。そうしたら早川さんは「震災が起きた以上、町は復興できない」と言った。自分は復興があって当たり前だと思っていたが、そもそも復興はできないと思っている人がいるのが驚きだった。そして早川さんは「故郷に戻らなかった復興に対して悲しく思った」と言った。じゃあ復興はどうあるべきなのか。

自分は全体を通して、「復興の主体とは」について考えてきた。早川さんは故郷に戻らない限り復興はないと言っていた。だったら復興をするなら故郷に住んでいた被災当事者（避難者を含む）が主体であるべき。じゃあ果たして今の復興の主体は被災当事者に在るのか。自分は、地域によって差はあるが無いに近いと思う。行政が主体になって「復興」という大規模事業、国策の一種になっている気がする。東日本大震災・原子力災害伝承館では最後のコーナーで創造的復興という言葉を用いながら工場の誘致や、ドローンやあらゆる機会を使った大規模農園の説明があった。未来を象徴とした最先端の技術を強調としていて、震災で開いた土地が、いわゆる「実験場」になっていると思った。福島イノベーション・コースト構想といった行政が主体になって進めている大きな復興政策もその一つだ。その様子は、まるで「原子力明るい未来のエネルギー」をキャッチコピーにした福島原発かのような。また同じようなことが惨事便乗型資本主義的に福島に入り込んでいると感じた。はたして福島イノベーション・コースト構想で、全国各地に避難した避難者たちは帰りたいと思うのか。避難者にとって故郷はどうだったのか、どう故郷が震災によって壊れたのか。それを行政は考えていくべきだし、被災者当事者・避難者当事者の多様な声をどう拾っていくかが復興のあるべき進め方だと思う。「故郷を大事にしてほしい」、早川さんが言った言葉には、今の復興に対する想いがあったと思う。

福島のような復興の形に対して、そのようなことを感じた。防潮堤や大規模公園、交流の難しい施設など。とても開発的で既定路線のような型にはまっていると思う。防潮堤やソーラーパネルによって地元故郷の田園風景のような景観が失われている。そしてこのような復興の賛否によって住民の中で分断、対立も起こっている。じゃあ交流の難しい施設（代金が高くて貸し切り状態のような体育館とか）は震災、復興で起こった分断・対立も解消するのか。実際にガンガン除染したりと、行政主導の「復興」をして被災者が不在のまま、町（ふるさと）の姿が大きく変わってしまっている。これじゃ避難者が返ってこないのも無理がない。結局、被災当事者、避難者の声が理解されず、拾ってもらえず、多様な復興になっていない。それは加害当事者のごまかし（創造的復興、理解した気になっている）と被災当事者のあきらめ（帰りたい故郷がない、分断、対立）にある。国の伝承館に多用されていた「創造的復興」という言葉自体が悪いとは思わない。また町を目指していく中で、壊れた建築物をそのまま建てる「原型復旧」ではなく、新しいアイデアや技術を取り入れて立て直す「創造的復興」にはとても意味があると思う。しかし自分が目にした福島や東北の復興のどこが創造的かよく分からない。新自由主義的社会にふさわしい形で以前の状態以上の復興していくのが創造的復興なのだろうが、以前の状態にさえ戻れていない人たちが実際にいる。仮設住宅での孤独死や、避難所での震災関連死、ソーラーパネルがたくさんあるふるさとの風景。自分はこれを見て復興しているとは思えなかった。

Hさん：浜通地区で現在実施されている3.11関連の動きを「復興」と仮定し考える。行政曰く、福島イノベーションコースト構想などが復興である。里見さんのお話を踏まえると過去の教訓を残す伝承活動も復興である。現地で見えてきた「復興」は、公、行政は未来のみを、民間は過去を見ているように感じた。前者は震災後、ゼロベースからの復興である一方、後者は今までに地域全体で積み立ててきたものの上にある復興だ。復興と言わない人もいるが、民間の人々考える復興は過去を踏まえた未来をみているように感じた。

まず初めに、公立の原子力災害伝承館は、事実ベースの展示であり、全体を通して「伝えたいこと」は防災と国の考える復興のように見えた。事故前、震災、復興の3つ展示の間に壁があるような印象もあった。はじめの螺旋状の時系列展示で最後が「原子力災害伝承館の完成」だったことから考えられたのは、“そこ”が震災後と新しい浜通りの区切りということ、震災と原発事故で崩壊した町をリセットしてRe.ゼロから始める浜通り開発の意思表示に思えた。

次に、ゆめのもりについて、今求められていそうな理想的な教育方法を一からできているという点で「いい学校」と考えることができる。ただ浜通り地区にあるという点において考えることがあった。地域の伝統や意思を引き継ぐ、震災前元々あった学校を復活させる、いや復興させるという選択肢もあった中ゆめのもりを開校した。ゼロベースからの浜通りを実験台にしているというか、過去に積み重ねられてきたものを重視しないということが広い意味では伝承していくという事の大切さを見ていないように思えてしまった。

続いて民間の施設について例をもとに考える。相馬高校放送部では、先代からの“伝統”を意識した活動であり、前述したように過去に積み立てられてきたものを今、未来に生かしている伝承活動のように思えた。具体的にいうと、劇『今伝えたいこと(仮)』で語られた当時被災した人の心情というものは、新しく作った場所では生まれにくいものであろう。勝手な解釈ではあるが、同じ学校だったからこそ同じ期間に学校にいなかった部員同士でも引き継がれているのではないかと、引き継がれていきやすいのではないかと感じた。また、宝鏡寺の伝言館では、同じ核被害という視点から原水爆にも触れ、そしてそれらを作った早川和尚の思いのようなものも伝えられていた。過去に核による大きな被害がありながらも再び繰り返してしまった人類に向けて、日本人にとって同じく身近であり、周知な事実である原爆を展示した工夫は、より人々に訴えかけやすいのかなと思えた。かなり踏み込んだ内容の展示について、感想ノートに書かれていた「知らなかったこと、知らされなかったことを考えることができた」という言葉が印象に残った。楢葉町大谷地区の多くの魂が眠り、早川元和尚の故郷でもあるからこそ、過去を言い伝えていく場所としてより深い意味をなしているのではないだろうか。相馬高校、伝言館以外の民間伝承施設についても、言葉に変換しきれない当時、今の思いをアートで訴える、おれ伝、震災で一度止まりながらも再建をした双葉屋、現地で300年以上の歴史を積んできた古滝屋の考証館いずれも過去を意識して今、未来に生かそうという意思を感じた。

民間の復興の形を総括すると、直接的な復興事業がある石巻に対し、浜通りは、ただ知らないだけかもしれないが、現地で直接的な復興事業は民間ではほぼ見られなかった。これは推測になるが、浜通りでは行政が避難指示区域を設定し、その更地を東京にある中央政府、行政が彼らなりの復興を行なっているため、民間の復興は直接行えないのではないだろうか、もっと言えば、原発が浜通りに建設された時からほぼ中央の植民地だったかもしれない。行政が今の復興から手を離したら良いというわけでもなく、浜通りの被災状況は比較的復興のゴールが見えやすい石巻と違い、復興のゴールが見えないからこそ、石巻のものわさんや鮎川捕鯨のような賑やかさを取り戻そうということが難しいのではないかと。その段階に至っていない、至らないのではないかと感じた。では、このままでは浜通りは植民地のままかということ、そうではなく民間の復興が公の対として存在する事で、現地が中央のものではなく現地住民の意思が残り脱植民化に繋がる。つまり現地に復興のための伝承と脱植民化のための施設として復興の拠点があるということに意味があるのだらうと感じた。

次に、今後責任を手にする社会構成員として原発に関わっていく中でまず伝承、証人の一員となる必要がある。その上で「原発は恐ろしい被害を出すから原発を無くそう」をゴールにするのではなく、「原発事故が

起きた→なぜ起こった→これこれこういう原因がある→この原因は他の問題も起こしうるぞ」というところまで想像をする伝えるというところまでが必要だと思った。

浜通り地区の学びを通して、事実資本で簡単に考えることができず、答えもない問題を考えようとした時、限りなくある話題についていざどの話題から考え始めれば良いのか、そもそもどこが論点で、何を大切に判断しながら考えていけば良いのかわからなくなることが多かった。自分の中で解決することは無いようにも思える課題であるが、ツアー後に教員が配った「世直しの倫理と論理」（小田実）にもあったように論理で動き出さず、自分の中に無意識にある倫理で動いていくというような考え方の方がいいように思う。

I さん：福島スタディーツアーへ行って私が一番心に残ったのは「言葉と人の難しさ」です。

一日目の相馬高校では一度見た映像だったのである程度わかってはいたけど改めて解説付きでお話を見聞きすることができ、その中でも「ALPS 処理水」の「メディアは生の声を報道するべき」という言葉に共感を持ちました。私自身も猫部で何度かテレビや新聞の取材を受けましたが、本当に伝えたいことが伝わっておらず、意図せずヘイトを受けたりしました。私たちの取材は期間が短かったのも要因かもしれないけどじっくり時間をかけて話を伝え、報道側の人とも話し合うことが大事なんじゃないかなあとと思った。こちら辺は風評被害の話とかとも繋がってくるなと思う。相馬高校の生徒さんに聞いたかったけど聞けなかったことがあって、これから震災を本当に知らない世代が来るけどその時放送局はどうしたい？って聞いたかったです。知らない人が伝えていくことはどうなんだろうかと考えてもっと対談みたいな形式でお話ができたらよかった。（というかそんな形式だと思ってたからそこは少しだけ残念だったかも。）

おれたちの伝承館は今回のスタディーツアーで一番悩んだ「花は咲く」の詩がずっと心に残っています。知らなかったことで誰かを傷つける可能性があるんだって、今回この詩ですごく実感して知らないことへの恐怖がずっと今も残ってます。宮城の学習では比較的柔らかに迎え入れられていたから…この詩のことを考えると苦しくなる。合唱団でなにも知らない頃に歌ってたから。あの時私が誰かを傷つけた可能性はほぼないに等しいけど、それでもあの時知れなかったことが私にとってはすごく苦しく、励ますものだと思ってた歌が誰かを傷つけるものである可能性が苦しい！もっと早くから知りたかったなあ、東日本大震災のこと。でもこのことを知れたからこれからは「知れてよかった、知らないままにならなくてよかった」に徐々に気持ちを切り替えられればいいなと思う。この詩で福島のことを知るってことの重みを感じて私たちが今まで学んできたことのとらえ方がまた180度変わって向き合うことの苦しみを久しぶりに感じました。

二日目では東日本大震災・原子力災害伝承館に行きました。入った最初の感想はとにかくきれいな施設だなって感じでした。通路を回って歴史を振り返る展示から入るのが結構導入できてよかったと思う。とにかく震災を知らない人でも分かりはするよなって感じ。ここで一番印象的だったのは教員が話した「震災当時」と「震災後」の写真はあるけど「震災前」の写真はないよねって話、地域との繋がりを感じなくて、なんというか「国や県」の施設で隔絶されてる感じがしました。国の施設は震災後の、「国の言う復興」ばかりを見てる感じ。おれたちの伝承館は地域や人々の営みが前面に出されてたからより国の伝承館と民営の伝承館の差を感じた。宝鏡寺、伝言館は国の施設を見た後だったから余計に民営の圧というか熱意を感じた。熱意って表現は違うかもしれないけど、伝えたいという思いのようなものが強かった。簡単に言ってしまうと思想の圧がけっこうあったかな…？伝言館は「他人事ではないんだ、今なんだ」という言葉が特に心に残ったと思う。それこそ花は咲くの詩でもそうだけど「他人事」にしてはいけないと身に染みて感じたからこの言葉は大事にしたいなと思いました。双葉屋旅館でも聞いたけど放置された家でとれたネズミが28匹いたとかの動物被害の話は人間の手の届かなさがダイレクトに伝わってきて衝撃だった。窓の外で見たあの家々に今もなお被害が続いてる家があるのだらうと思うとどうにもできない無力さを感じる。生物濃縮の話とかも聞くと余計に手出しが難しい…。

三日目のゆめの森学園では自由の森学園の背を伸ばしたみたいな印象だった。卒業生がかかわってるから自由の森のいいところを伸ばした感じがした。もっと生徒たちと触れ合えればよかったけど…。でも考えてみると新しく土地を作って完全に新しいものを作るって活動だけを切り取ってしてみるとイノベーション構想とゆめの森ではなんの違いがあるんだろうと思った。未来の形がはっきりしてるか否かの違いなのか、違いを見比べることすら間違いなのだろうか。復興の形はそれぞれとは言ったものの難しい。考証館と古滝屋では夕風さん（大熊未来塾木村さんのお話）がなくなった理由が津波で亡くなったのか置いてけぼりにされたからなのか分からなかったって話がむごいと思った。たしかに親などが亡くなってしまっ置き去りにされてどうしようもなくなって死んでしまった人たちはいるんだろうなって新たに気付かされた。

そして「税金で施設が作られていくのはどう思うか」という問いで「申し訳ない」とこたえられていたのが忘れられない。申し訳ないという言葉が被害者の方に言わせてしまうような現状はおかしいんじゃないかと思う。そういったジレンマを抱えたまま死ぬまで生きていくのは苦しいだろうと赤の他人でも思うから…。チッソの件もそうだけど被害者の方が苦しまなければいけない構造ってなんなんだろう、社会の苦しさをを感じる。もうひとつ印象に残ってるのは駅前で見守ってきた桜まで伐採されてその桜にあった物語まで消えてしまったという話。歴史上に残るような大きな出来事がなくても、町の人々に愛された歴史があるし、そういったものを残すのは大切だと思う。消えていい歴史ってないよなと改めて気づいた。「復興」のために思い出を消してしまうのは「復興じゃない」と私は思う。

三年生という一番最後の年で一番難しい話で、自分が何を言えればいいのかぜんぶ分からなくなって時間がたっても全然まとめることができない。時間が足りない。しかし知って、触れたからには伝えるために学び続けなければいけないと思った。卒業しても今回のスタディツアーで聞いた言葉は大事にしていきたい。ぐちゃぐちゃだけど今言葉として書けるものはこれくらいです。言葉って伝えるって難しい。これを私は今後どうやって言葉にしていけるのか考えなければいけませんね…。

Jさん：今回のスタディツアーは、私にとって、2年間この講座で考えてきた「復興とは何か」と言う事を根本から覆された様なツアーだった。

私は誰が悪いのか、と言うのが見えにくいものだと思っていたので、早川さんのように自分に責任があると思っている方がいることに驚いた。だが、3日目にゆめの森の南郷さんが「誰かが誰かに任せていて、全ての国民に原発事故の責任がある」と仰っているのを聞き、腑に落ちたような気がした。直接の関わりはなくとも、むしろ関わらなかった事によって、自分にも少なからず責任はあるんだ、と考えることは大切なことなのでは無いだろうか。多くの人が責任の所在を人任せにしている今の状況は、南郷さんの仰っていた問題点を誰かに任せていた時と同じ状況なのでは無いかと思った。同時に、原子力発電所を安全に稼働できる方法を考えて欲しい、と言う訴えが聞き入れられず、事故が起こってしまった。と言う事と、今公共の施設などが市民の意見を取り入れず議論されずに建設されている。と言う事も同じだと思った。どうして同じ事を繰り返してしまうのか、そこに暮らす人はその危うさに気付いているのに、行政は何故それらの意見を取り入れた復興の形を考えることが出来ないのかとても不思議に思った。

石巻のツアーの時よりも、民間の施設が多かったからなのかお話を聞いた方々の考えや気持ちに触れる事が多かったように思う。今まで私は、被災者の方々の気持ちや、復興に携わる方々の復興に対する考えなどを特に知りたい、理解したいと思ってこの講座で学んできた。だが、いざ今回のツアーで触れてみて、もしかしたら私のこの「知りたい」と言う気持ちさえも煩わしいと思う方がいるのでは無いかと思った。今まで語りた、伝えたいと言って下さる方の話を聞いていたけれど、それさえも嫌なんじゃないか、とか、20人を超える大人数でツアーをしているけれど、大人数で生活圏内に踏み入れられて「ここは観光地じゃないんだよ」とかって考える方もいるんじゃないか、自分が学べた気になっているだけで、自己満足になっているんじゃないか、とか色々考えてしまって、何か行動を起こすことが怖くなってしまった。埼玉に帰ってきて

からもずっと考えていて、ちょっと泣いた。他人の気持ちは理解しきれないな、とまた最初に感じた事をまた強く感じ、最初に戻ったような気持ちになってしまった。今まで何度も「復興ってこんな事をしたらいいんじゃないか？」といったことを考えていたけれど、結局は外野の意見でしかなくて、その考えを持つことだっただけで見方を変えれば間違いだと言えるのかもしれないと思った。ずっと考えていても全然まとまらなくてよく分からなくて、理解しきれないなって自分と切り離して考えてしまいそうになるけど、それを続けてしまおうと振り返りなどで何度か出てきた「無自覚の部分で傷つけてしまう」という所に繋がると思う。わからずとも考え続け、震災を知らない世代がこれからどんどん増えていく中で風化させず伝え続けて行く為になにかしなければいけないと改めて感じた。今回お話を聞いた方の年齢層が高く、私の周囲でも東北と復興を取っている人くらいしか震災に関心のある人もあまりおらず、私が少し話した所で親もその時だけで興味を持ってはくれない。このまま何もしなければ本当に風化して行ってしまうのではないかと、とずっと不安に感じている。せっかく色々な方が伝えて下さって、私たちは運良くそれを受け取る事ができたのだから、受け取って終わりではなく何かしなければいけないのではないかと。今回私が感じたように踏み込む事はとても怖い事だけど、踏み込まなければ得られる物もそれだけ少なくなってしまう。「最初に戻ったような気持ち」と書いたが、少し時間を置いて改めて考えてみる今はそれだけじゃないと思うことが出来る。分からない事と考える事は全く別物であって、こうして考える機会を貰ったからには、分かった気にならないようただの自己満足で終わらないよう、これからも知ろうとし続けて、考え続けていきたい。

Kさん：自分は3年間この講座を受講していて、3年間復興とは何なのかを考えていたが今回のツアーで今まで自分が考えていた復興というのが変わってしまったツアーになった。自分はこのモヤモヤしたまま卒業したくないです。今の東北と復興のメンバーでもう一度考えたい。もっとたくさん学びたい。それがもうできないのがとても寂しいです。3年間じゃ全然足りないです。けどこれまで学んできたことを誰かに伝えることならできます。興味がある人、ない人でも伝えていかないといつかこの問題は消えていってしまうのではないかと思っています。これから東日本大震災を知らない世代が増えていきます。今、自分たちは東日本大震災を知る最後の世代でもあります。どう伝えるか、どう考えるかを大切にしたいです。卒業してもこの問題を考え続けたいなと思いました。

5. スタディツアー感想から見えること

今年度は立命館大学院の村本邦子教授に大阪から来ていただいて、石巻市スタディツアーでの報告会で講演いただいたからか「証人」になるということをキーワードに語る生徒が数名いた。

そして石巻市スタディツアーと浜通りスタディツアーを実施して感じたことは、それぞれの「被災」と「復興」の現在地が違うことと、関東に住んでいる我々が訪れることによって生じるポジショナリティの違いである。もちろん石巻市スタディツアーは3年前から実施しているからこそ、お互いに積み上げられてきたものもあるだろう。今回福島県浜通りスタディツアーを実施して、この1回で終わるものではなくて毎年行っていくことで、同じように積み上げられていくものがあれば良いと思う。一方でやはり福島第一原発が東京電力の原発であったこと、この原発で作られた電気が関東に供給されていた、関東で豊かさを享受していたことは、大きな意味を持つように思う。現在もまだ廃炉作業は進んでいるし、東電を相手取った裁判も行われている最中である。東電による豊かさの一端でも享受している関東に住む私や私達はその事実と向きあいながら、考えていかなければならない。

スタディツアーがもたらす教育的効果、対人援助との関わりについてもこの冬少し考えたので書き残しておきたい。

まず改めて村本教授の「被災と復興の証人になること」という言葉の持つ意味についてである。以前までは前半部分「被災と復興の証人」というところまでしか注目をしていなかった、あるいは意味として重点を私は置いていなかったように感じる。「被災と復興の証人」をゴールにおいて、生徒達が「東北と復興」の学びを通じて「被災と復興の証人」であると言えるようにすることを目的としていた。しかし今回感じたのは、「被災と復興の証人になること」の「なること」の部分が重要であるということだ。「なること」とはプロセスを指し、言い換えれば「なり続けること」なのかもしれないと考えている。そして「被災と復興の証人になること」までをエンパワー、支援することが教員の役割である、と。

そのように考えるようになったのは次のような理由による。まず多くの現在の社会科の授業においては「中立」ということが重視される。ポジショナリティにかかわるものである。この「中立」をどのように解釈するのかは今後も課題であるが、今回のスタディツアーにおいて「中立」とはどちらにも与しないことであり、言ってしまうと、「こういう意見もあるけど、こういう意見もあるよね」とまとめることである。しかしそれは当然、その言葉自体が持つ加害性もあるし、それ以上に関東に住む〈わたし〉たちが言うことによってかなり強い加害性を帯びてしまう。それは福島第一原発を動かしていた東京電力によって多かれ少なかれ恩恵を受けているからである。事前学習の水俣病について扱う中で相思社の永野三智さんが facebook の記事の中で紹介されていた事例。「環境省の人は「チッソじゃなくて島の人を憎んでいるんですね」とか「へえ、大変ですね」とか「ひどいですね」とか「ダメですか」とか言いました。言葉が違うという感覚。それは東京の人と不知火海の人という方言の違いではなく。一方通行な、テレビを見て、お茶の間で感想をいうような。」「歩き始めた彼は、「あたどん（あなた方）には本音は言わんとばい」と職員に言いました。職員は軽く「えー、本音でいきましようよー、本音で」と流していました。私はその含蓄ある言葉に、心打たれました。目の前の、別空間で放たれたこの言葉をどう理解していいのか？ 私と同じ年の頃からどんな思いで環境省と交渉をしてきて、その挙句、あなたがたに本音を語れないと言っている彼の切なさだったり、そう言うことで同時に彼は、自分の心や尊厳を守っておられるのではないだろうかとも感じて、胸が熱くなりました。」このことと同じことが、つまり環境省を同じことをこの「東北と復興」の高校生達がしてしまうかもしれない。実際に双葉屋旅館での夕食をとりながらある生徒が「でも原発事故って自分達が考えてもどうしようもなくて？自分達が生まれる前の人達が決めてたことだったし」と発言し、それに対して女将さんが笑顔で「そうだよなあ」と言う一幕があった。翌日の女将さんの講演の中で、福島第一原発について直接的な話が出ず、その後の町おこしのことが中心で語られていたことには何かつながりがあったのではないだろうかと思わずにはいられない。

ジュディス・L・ハーマンは「人災の場合には、証言者は被害者と加害者との争いの中に巻き込まれる。この争いの中で中立的位置を維持することは論理的に不可能である。第三者はどちらかの側に立つようにさせられてしまう。」「加害者の側に立つことは楽であり、そうになってしまいがちである。加害者は、第三者に何も手出しをしないでくれというだけである。加害者は、悪事を見たくない、耳をふさぎたい、そして口をつぐんでいたいという万人の持つ意向に訴える。被害者のほうは、これに対して、第三者に苦痛の重荷をいっしょに背負ってほしいという。被害者は行動を要求する。かかわることを、思い出すことを要求する。自分の犯した罪の説明責任 *accountability* を逃れようとして、加害者は忘れるのに役立つものならできる限りを何でもやる。秘密を守らせ口をつぐませることは加害者の第一防衛線である。もし、秘密が曝かれたならば、加害者は被害者の証言の信憑性をあげつらう。もし被害者の口を完全につぐませられなかったならば、加害者は誰も彼女の言に耳を傾けないようにする。この目的のために、彼は堂々の論陣を張る。もっとも厚顔無恥な否認から初めてもっともエレガントでソフィスティケートティッドな合理化までをずらりと揃える。」と言っている。福島第一原発について教えることは、もしかしたら「被害」を受けている人達に対して「加害」に与することを教えるかもしれない。「福島は元通り安全だ。安全ではないという言葉は風評被害であり許されない」「もしも安全ではないと言っている人がいたら丁寧に説明していくことが福島の復興に携わることだ」といった言説（去年実際に復興庁で聞いたのだが）は、実際に「被害」はあると今もなお訴えたり苦しんでいる人達、例えばBさんの

言う「例えば、福島では山菜やきのこを採ることが季節の楽しみの一つとなっている。それを近所の人におすそわけすることで、地域の人々が自然とつながりを深めている。これらの活動は単なる食料調達ではなく、人々の暮らしや絆を作っていく大切な要素」が失われた(失われた)と感じている人達にとっては傷つける言葉になるかもしれない。

そうした自己の「加害」に与しているかもしれないという点については、自分の言動や考えに対して、想像力を持つことが重要になるのではないだろうか。例えばAさんの言う「考証館でお話を伺った木村さんのお話から「防潮堤の下にはまだ遺骨があるかもしれない。復興の下で捜したいと言えない遺族がいるのではないか」という言葉があった。国が進める政策によって苦しみ続ける人がいることを知った。これは福島だけに限らない。水俣病や、沖縄戦、その他にも社会で起こる様々な問題に言えることだ。国の利益のため、一部の人が犠牲になる。」という社会全体の中で起こっている問題に対しても想像して視点を転じること、Eさんの「私が1番印象に残った点は、やはりフレコンバックについての詩だと思います。環境学の選択授業で存在は知っていて、今までは、土等の放射能廃棄物が沢山詰め込まれていて、福島第一原発付近に、これまた沢山、置かれているだけのものかと思っていて。その中の幾ばくかに詰め込まれているものが、ショベルカーの黒い爪で引き裂かれて、切り取られた、誰かの故郷で、思い出であるという考え方は、今まで一度も描けていなくて。言い方はあれかもしれませんが、今回のスタディーツアーで知れて、良かったなと思いました。知れてなかったら、もしかしたら一生知らずにいるところだったと思います。この時の感情と同じような感情を抱いたのが、国の伝承館…?の外にあった写真達のうちの一枚で、小さな姉妹の2人が、防護服を着て、子供部屋のようなところで、お人形等を白いビニール袋に入れている写真だったのですが、もうこの子達が、このお部屋で防護服をとって、震災前のように過ごすことは、もうできないのだろうな。もっと行くと、もうこの部屋に入るのも、この写真の時は最後で、この後お家は取り壊されてしまったかもしれないと思うと、原発事故がどれだけ、今までの日常と、故郷を壊すか、というのをありありと感じました。」というフレコンバックと姉妹達の写真から日常を想起していくこと、Iさんの「おれたちの伝承館は今回のスタディーツアーで一番悩んだ「花は咲く」の詩がずっと心に残っています。知らなかったことで誰かを傷つける可能性があるんだって、今回この詩ですごく実感して知らないことへの恐怖がずっと今も残ってます。宮城の学習では比較的柔らかく迎え入れられていたから…この詩のことを考えると苦しくなる。合唱団でなにも知らない頃に歌ってたから。あの時私が誰かを傷つけた可能性はほぼないに等しいけど、それでもあの時知れないでいたことが私にとってはすごく苦しく、励ますものだと思ってた歌が誰かを傷つけるものである可能性が苦しい！もっと早くから知りたかったなあ、東日本大震災のこと。でもこのことを知れたからこれからは「知れてよかった、知らないままにならなくてよかった」に徐々に気持ちを切り替えられればいいと思う。この詩で福島のことを知ってことの重みを感じて私たちが今まで学んできたことのとらえ方がまた180度変わって向き合うことの苦しみを久しぶりに感じました。」・「伝言館は「他人事ではないんだ、今なんだ」という言葉が特に心に残ったと思う。それこそ花は咲くの詩でもそうだけど「他人事」にしてはいけないと身に染みて感じたからこの言葉は大事にしたいなと思いました。双葉屋旅館でも聞いたけど放置された家でとれたネズミが28匹いたとかの動物被害の話は人間の手の届かなさがダイレクトに伝わってきて衝撃だった。窓の外で見たあの家々に今もなお被害が続いてる家があるのだろうと思うとどうにもできない無力さを感じる。」・「もうひとつ印象に残ってるのは駅前で見守ってきた桜まで伐採されてその桜にあった物語まで消えてしまったという話。歴史上に残るような大きな出来事がなくても、町の人々に愛された歴史があるし、そういったものを残すのは大切だと思う。消えていい歴史ってないよなと改めて気づいた。「復興」のために思い出を消してしまうのは「復興じゃない」と私は思う。」という言葉達。ここには自分の行為がもしかしたら「誰かを傷つけるものである可能性」とそれに気づいたことで自分の学んできたこと、考えてきたことが「180度変わって向き合うことの苦しみ」を感じている。様々なことを想像するという事は必ずしも自己にとって都合の良いものばかりとは限らない。Jさんの「今まで語りたい、伝えたいと言って下さる方の話を聞いていたけれど、それさえも嫌なんじゃないか、とか、20人

を超える大人数でツアーをしているけれど、大人数で生活圏内に踏み入れられて「ここは観光地じゃないんだよ」とかって考える方もいるんじゃないか、自分が学べた気になっているだけで、自己満足になっているんじゃないか、とか色々考えてしまって、何か行動を起こすことが怖くなってしまった。埼玉に帰ってきてからもずっと考えていて、ちょっと泣いた。他人の気持ちは理解しきれないな、とまた最初に感じた事をまた強く感じ、最初に戻ったような気持ちになってしまった。今まで何度も「復興ってこんな事をしたらいいんじゃないか？」といったことを考えていたけれど、結局は外野の意見でしかなくて、その考えを持つことだって見方を変えれば間違いだと言えるのかもしれないと思った。ずっと考えていても全然まとまらなくてよく分からなくて、理解しきれないなって自分と切り離して考えてしまいそうになるけど、それを続けてしまうと振り返りなどで何度か出てきた「無自覚の部分で傷つけてしまう」という所に繋がると思う。わからずとも考え続け、震災を知らない世代がこれからどんどん増えていく中で風化させず伝え続けて行く為になにかしなければいけないと改めて感じた。」という色々なことを想像した上で「他人の気持ちは理解しきれない」と感じて、それでも「無自覚の部分で傷つけてしまう」かもしれないという想像と向き合い考え続ける、伝え続けていくことへの想いに表れている。これらの言葉は生徒達が実際にスタディツアーの中で目にした風景や耳にした言葉から想像することができたからこそ感じている苦しさや難しさであろう。こうした想像の結果生じる苦しみは、学びを進めていくからこそ生じているものだとも言える。

信田さよ子は上間陽子との対談の中で、「日本の臨床心理学の多くはフロイトに依拠してきました。フロイトの精神分析は中立性を基本にしています。Passive neutral というんですかね。どちらかではなく、両方を俯瞰的にとらえる立場に治療者がいるという前提が、中立を意味します。だから中立・客観はむしろ当たり前の前提なんです。私はそれは無理ではないか、その場合の中立は必ず「力のある側」「強い側」に与してしまうのではないかと考えています。(中略) もうひとつ気づいたのは、私が中立的になろうとして聞いたとき、目の前に座っているひとの口調が明らかに変わったことです。私のポジショナリティ・位置取りの変化は、相手にすぐわかったんですね。それまで自分の言うことを信じて聞いてもらっていた、味方だと思っていたのに、変わってしまった。唯一の味方だと信じたのに、裏切られたと思ったのでしょうか。」と語っている。加害と被害のどちらでもない、中立にいて話を聴こうとしたり中立の位置から応答することそのものが暴力性を、加害性を帯びてしまう。Aさんは「国が進める政策によって苦しみ続ける人がいることを知った。これは福島だけに限らない。水俣病や、沖縄戦、その他にも社会で起こる様々な問題に言えることだ。国の利益のため、一部の人が犠牲になる。しかし、私は一概に国が悪いと言えない。なぜなら私は国が取り組む政策によって利益を得ているからだ。そうすると、私は間接的に「加害/悪」ということになる。」と書いている。Dさんは「水俣病も福島原発事故も、どちらも企業と経済成長が根底にある事象です。どちらも発展によって犠牲となり、発展や風評被害のために誤魔化され、迫害された地域住民や被害者がいると知りました。そしてその「発展」の責任は一般国民にもあると知りました。」、Fさんは「可視化されない被害というものがどれほど人を不安にさせるか、心を乱すのかを痛感した。さらにこういった可視化されない被害というのは誰にとっても加害者になりうるということを理解させられた。根本的な原因の責任追及はもちろんするべきだろうが、そういった根本的なものに全ての責任を押し付けて可視化されない被害に加担した加害者の責任が放置されているのが現状ではないだろうかと感じるようになった。その加害側に立っている者は自分も例外ではないと自覚したからだ。」と自らの責任(加害性)に気づく。しかし、Eさんが言うように「ですが私は、本質的に考えるならば、これは今の人間社会の構造上、生まれてしまった歪みであって、これまで生きてきた誰しをも、曲解すれば加害者と取ることができるわけで…。被害者、加害者、という言葉を使うだけで、なぜか思考停止してしまう気がしました。全部全部、グレーゾーンなのに、それをはっきりさせてしまうような言葉だからかも知れません。」ということもあり得る。私は高校生達を加害者と責めるつもりはない。加害性をよく考えて欲しいとは言い続けてきたが、これは目の前の問題から距離を取り、被害者でも加害者でもないと中立的な立ち位置をとることで目の前で起きている出来事、発される言葉から逃げることで、そしてそれによって忘却や傍観者となって加害者に加担する側に

なって欲しくないからであった。もし東日本大震災や福島第一原発事故に関して加害者として責任を果たさなければならぬ大人やその恩恵を被ってきた者として、その大小はあれど戦後復興世代全体が問われなければならないだろう。私もその一人だ。では生徒達の立ち位置をどこに置いていたら良いのか、あるいは置いていたのか。

ある種後付け的になるが、精神科医でもあり社会学者でもある宮地尚子の環状島というトラウマの地政学を援用して考えたいと思う。もちろん高校生のスタディツアーであり、実際に患者を診たり治療したりする立場にあるわけではないが、東日本大震災という未曾有の状況に対して語られる言葉の中には「言葉で表現しえない」トラウマ的体験についてのものもあるため、援用して考えることとした。

冬休み明け、生徒達に宮地尚子の環状島の理論(サバイバルマップとして)を紹介し、自分達がどこにいるのかを考えた。私はこの講座では外側の尾根を上っているところだと考えたが、ある生徒がそれは違うのではないかと発言した。「私達は傍観者から外側の尾根に向かって泳いで行っている途中」だと表現した。なるほど、と感じた。外斜面をのぼっている人を宮地は「支援者」として表現している。この「支援者」という言葉に多くの生徒達は引っかかりを感じていた。自分達は「支援者」ではないのではないかと。確かに「支援者」の定義は難しい。スタディツアーを通して何かで誰かを「支援」しているということは、確かに私も実感としてはあまりない。むしろあくまでもスタディツアーはスタディツアー、すなわち生徒達の学びのためのツアーであって、生徒達が主体として為したことは学ぶこと、知ることであった。その意味ではこのスタディツアーを支えてくれているのがそれぞれのスタディツアーで訪れた先の住人であり、支援を受けているのは私達の方かもしれない。少なくとも授業者としての私は、生徒達の教育を現地の方達から支援されている。

しかしかといって、傍観者であるとも言いがたい。先に挙げた生徒が言った「尾根に向かって泳いでいる人」という表現はその意味でなかなか面白いと感じた。現地で語られる言葉や出会う人達はかなり「当事者性」も高い人達がいる。時に内斜面を覗かせるような場面、言葉もあったように思う。生徒達が言葉を失ったのは内斜面から内海を垣間見てしまったからではないかと私は考えていた。だからこそ立ち位置として外斜面にはいるような気がしていたのだが、確かに外斜面をのぼっていったというよりは、私達の方へ現地の方が歩み寄って下さった(それこそツアーを支援して下さっている)という意味が大きいかもしれない。

そしてこの「環状島」の理論を紹介した結果、生徒達から私はまたもや言葉につまる問いを投げかけられた。「私達は支援者であった/であるといえるか?」「支援の定義とは何か?」外斜面を登る行為、高校生達が話を聴くことに意味があると伝えた。しかし高校生達はその返事には納得はしなかった。自分達の学びを支えてくれたからこそ、楽しい思いもすることができているように感じているからだ。ツアーの中で何かを自分が為したということについて、むしろ何もできていない、スタディツアーを出発点に考え始めた自分達という語りをしているように感じた。そしてそれは支援というよりも知った責任をそれぞれがどのように果たそうとするのかを考える営みであるように感じた。それは私自身も同じように感じているからだというバイアスはあるだろう。岡真理の言うところの「〈出来事〉の記憶、〈出来事〉の痕跡、それは偏在している。しかし、「それ」はつねに、人の主体的な意識が捉え損ねるどこかにある。証言者たるジュネの背後から、淡々と〈出来事〉の痕跡を指し示す他者の声。〈出来事〉の痕跡と証言者を媒介するのは、この他者の声だ。他者の呼びかけに応えることでしか、私たちは、その痕跡に触れることができない。決して、〈出来事〉の全能な記述者たり得ない証言者。〈出来事〉に対する証言者の、その無能さ、徹底的な受動性。ジュネのそのルポルタージュに書き込まれているのは、「私」に先だつてつねに他者の声があるということ、この他者の声こそが、〈出来事〉の外部にいる者を——第三者を——証言者として召喚するのだということ、そして、〈出来事〉の記憶を分有するという営為とは、この他者の呼びかけの声にその無能さと受動性において応答するものにほかならないということである。」(『記憶/物語(思考のフロンティア)』2000年、岩波書店)であるかのように、すなわち当事者の方達の話の聴いて「〈出来事〉の記憶を分有するという営為」は「無能さと受動性において応答するものにほかならない」という応答に思える。とすればむしろスタディツアーをきっかけに応答していくのであろう。ハーマンの

言葉を借りれば「被害者のほうは、これに対して、第三者に苦痛の重荷をいっしょに背負ってほしいという。被害者は行動を要求する。かかわることを、思い出すことを要求する。」のであれば、その応答の一つの形として支援が、あるいは支援者としての在り方がこれから始まっていくのかもしれない。J・C・トロントが言うところの「関心を向けること Caring about」、「配慮すること Caring for」（岡野八代訳『ケアするのは誰か？新しい民主主義の形へ』2001年、白澤社）はある程度生徒達はできているのかもしれない。その上で「ケアを提供すること Caregiving」「ケアを受け取ること Care-receiving」が次の課題として残されているように、生徒達は感じているのではないだろうか。

だからこそ「支援とは何か？支援の定義とは何か？」「私達は支援者であった/であるといえるか？」という問いが生徒達から私に対して投げかけられたのではないか？そしてこの問いはとても答えることが難しい。そうであるともいえるし、そうではないともいえる。そもそも「支援」を定義づけることができるのだろうか？これは「復興」について考えることと同様に難しい。そして仮に「支援」を定義づけることができたとして、その上で「支援者」と立ち位置を示すことができるためにはどうしたら良いのだろうか？

今年度、生徒達に改めて答えられない問いを私は投げかけられた。「東北と復興」のスタディツアーを通じて、生徒達は支援や支援者という言葉について教員に投げかけた。これは私自身が応答責任を果たしていくべき問いの様に感じている。スタディツアーを通じて出会った景色、言葉等に対しての応答として生徒達からこうした問いが生まれた以上、教員である私はこの生徒達の問いに対して応答責任を果たしていく必要がある。そしてこれはこのマガジンでのタイトル「対人援助学の視点から」というところとも結びついているように感じている。